

三谷隆正の遺著『幸福論』を読む

—処女作『信仰の論理』との対照を中心に— (第6回)

"Happiness Theory";

Contrasting Takamasa Mitani's posthumous work with his first work

"The Logic of Belief" (Part VI)

鶴 田 一 郎

TSURUTA Ichiro

広島国際大学 心理学部紀要 第3巻 抜刷

The Bulletin of Faculty of Psychology, Hiroshima International University Volume 3
2015

広島国際大学

Hiroshima International University

三谷隆正の遺著『幸福論』を読む

—処女作『信仰の論理』との対照を中心に—

(第6回)

広島国際大学 心理科学部 臨床心理学科 鶴田一郎

1. はじめに—問題の所在—

三谷隆正著『幸福論』(三谷 1965a)は、三谷が『岩波講座倫理学』のために寄稿し 1940 年(昭和 15 年)に発行された「新生と浄福」(三谷 1940)を原型としている。その「新生と浄福」を全編に亙り拡大修正すべく、三谷は修正稿執筆を太平洋戦争が激化した 1942 年(昭和 17 年)から開始して翌 1943 年(昭和 18 年)8 月まで行った。そして 300 頁に近い長編として仕上げ、原稿を印刷所に廻し、その秋には病身の身でありながら自ら校正を行い、11 月に「まへがき」を記し完成させたものの、1944 年(昭和 19 年)2 月 17 日に著者の三谷隆正は天に召され、同年 3 月の同書の上梓に間に合わなかった。すなわち文字通りの三谷隆正の「遺著」となった珠玉の論考が『幸福論』である。その「まへがき」は、『幸福論』が「遺書」となることを読者に予見させるような内容で、殊に読む者の心の琴線に触れるものなので、本稿の冒頭、次に引用する。

「私は生まれてから今日に至る迄、数えきれぬ幸福^{あずか}と与ると共に、また幾度か人が見て不幸と看^{みな}做すやうな目にも会つて来た。わたしは仕合はせ者でもあり、又不仕合はせ者でもあるやうである。私は今茲にこの幸福論^{こゝ}をものにして、我こそは斯く斯くの幸福^{つか}を擲んで持つて居る。来つてわが幸福にならへと言ひ得るやうな、そんな幸福を誇示し得る者ではない。私の心は屢^{しばしば}鉛よりも重く、私の眼は男兒知命にして時に猶ほ女の如くに涙に漂ふ。私如きは畢竟病余衰残の憐むべき一無用人に他ならぬかも知れない。然し斯^{しか}かる私にもまた奪うべからざる幸福がある。それは決して唯^{ただ}の諦めではない。もつと強い、もつと深い、もつと旺^{さかん}な幸福とそのよろこびとがある。私はそのよろこびを語りたい。静に語りたい。読者よ、静に私の語るところを聴いて下さい」(三谷 1965a, pp.217-218)。

本稿では、三谷隆正の遺著『幸福論』での主張と、処女作『信仰の論理』(1965b)で展開された三谷隆正の根本思想とを比較対照することを通じて、『幸福論』を単なる三谷の著書の一つとしてだけでなく、この書が三谷隆正という一個の人格がもつ不可分なる三つの位相、すなわち「信仰」と「学問」と「生活」が集約的に表現されたものであり、それは同時に後世の人びとに遺された、静寂の中にも情熱(passion)を秘めた「遺書」であったことを明らかにすることを目的に論究を進めていきたい。その際、まず『幸福論』そのものをテキストにし、各章ごとに要約し、適宜、要約者の注を

付していく。次に『信仰の論理』を中心とする三谷のその他の著作・論文等と『幸福論』との対照を通じて、三谷隆正という人の「存在の根底」を支える思想構造を明らかにしていきたい。なお、今回は、その第6回目(最終回)として、『幸福論』最終章である第六章「幸福の鍵」を検討する。

2. 「第六章 幸福の鍵」を読む

2-1. 要約

第一節 パスカルの賭

パスカルは彼の『随想録(パンセ)』¹⁾の中に、神の实在・非实在の問題が理知では決められぬ問題であること、つまりところそれは我々が我々の一生を賭けて決めねばならぬ問題であることを論じた手記をのこしているが、その論旨を要約し又布衍(敷衍)^{またふえん}して述べると次のようになる。

有限は無限の前に出れば無に等しい。無限に対しては有限を加えても減じても増減はない。神と我らとの関係も斯く^かの如^{ごと}し。神は無限にして我らは有限。有限なる我らの理性を以てしては、無限なる神を把握したく思っても把握の手懸りが^{てが}ない。神は理性を以て知るべくもない。ただ、我らは神を知らないながらも、なお神を考えることはできる。しかし、神については一切手懸りが^{いっさい}ない。ただ信仰により我らは神の实在を知り、栄光の示しを受けるのである。そこで神の实在・非实在の問題は理性的には賭けでしかあり得ない。しかも、この賭けは回避することができない賭けである。そして、この賭けにおいて賭けられるべきものは我らの理性と幸福、失う恐れのあるものは真理と善とである。

もし神有り^あと賭けたらどうなるか。神有り^あと賭けて生活する時、我らの生活は愛と誠実と義とに富むものであり、己^{おのれ}に対して又隣人と社会一般とに対して福祉豊かなものであることができるであろう。しかして後、神また^{また}实在すと確認したら、我らの福祉は無限大であろう。反対に神なしと賭けて生活するとする。その場合、その生活が愛と誠実とに富む生活であることは難いであろう。むしろ各人互いに神なしと賭けて生活したならば、この世はさながらが餓鬼道地獄に類した修羅場であるだろう。その上に、もしこの賭けの誤りなることが証明せられて、神有りて義を以て審判したまうと確定したら、その反対を賭けた人々の悔いと悲しみとは限りないことであろう。又よし神なしと賭けたる賭けが当たったところで得るところは何もない。

パスカルが、ここで言う賭け、即ち^{すなわ}理知を超えての断行実践と、それに必ずや伴うところの冒険感、この冒険感は人生におけるすべての真摯なる実践につきまとうものであって、人間が人間である限り、その限られたる理知を以てしては、この冒険感をなくして終^{しま}うことはできない。新生による二元相剋克服者^{にげんそうこく}といえども、この冒険感なし直ちに不秩序を克服し得るものではない。しかし、人知に限りのあるごとく、信仰にも限りがある。刻々に神来^{きた}って我らに信力を藉したまわずにして、我らに何の力ある信仰あらんや。この意味において新生は新しき創造であるのみならず、つくりつくりて刻々新しき創造の連続でなければならない。こうした不安定、やはり一刻も手を離しては置けぬという未完結態、この不安と動機とは人間生活のあらゆる面に低迷して去らない。随^{したが}ってまた人間の幸福も、人間が人間であって、この地上にいぶきする限り、この意味の不安と動揺

とを伴うことを免れ得ない。人間が享^うけ得る幸福は限られた幸福でしかない。完^まくしてゆるぎない幸福は、この地上にはないのである。

第二節 「至福共働」(幸福の至上境地)

カトリック教会神学²⁾の教義^{おし}の訓^{おし}えるところによれば、人間の至高の境地は、面と面とをあわせて神を見奉^みること(コリント前書 13・12)、即ちいわゆる visio beatifica 至福直観³⁾、並びに神の審美完全を愛し楽しむこと、このふたつにあるという。このふたつは必ず相伴^{あいとも}なうのであって、至福直観とまた必ずこの直観に附随^あするところの神への熱愛、並びに歓喜溢るる味楽と、これが天国において我らを待ちつつある祝福の実質であるという。

この至福直観の内容に関して、カトリック教会神学は次の四点を指摘している。第一に、この直観は如何なる種類にもせよ、肉眼に類する感覚的視力によるものではない。第二に、この直観が如何に至福至純の消息であるにもせよ、それは決して神を完全に把握理解するものではあり得ない。神はただ神自身によりてのみ完全に把握せられ得る。第三に、この直観は感銘直截直接端的なる直視直観であって、間接にして模糊たる推理のたぐいではない。第四に、この直観は全く超自然的なものであって、自然のままなる理性を以ってしては如何にしても到り得ないものである。故に、ただ神の恩寵による賜物として、その恩賜^{あずか}に与^ありし者のみ、この直観に与^あることができる。ただし、こうした至福の境地は天国の消息であって、地上に現存する我々が今直ちにそこに到り得るといのではない。しかし、それはすべての造られたる者の存在意義の頂点であり、人生の究極の目的である。

上のような至福直観はダンテ⁴⁾のいわゆる「知性に安息を与ふ」(『神曲』天国篇 第28歌 108行)のものである。よって神の實在についての知的不安動揺が一掃され、随^{したが}って人生と全實在との意義目的についての曇りがすっかり拭^{ぬぐ}い去られる。斯くして我々の幸福が些^{すこ}しも陰のないゆるぎないものになる。即^{すなわ}ち幸福の至上境地は曇りなく明智の境地である。その秘訣は見ることであって働く事ではない。ダンテの語りを借りて言えば、真理観照が先であって愛の実践はこれに従うのである。極論すれば、古今東西の哲学宗教に顕著なる特色は主知主義の徹底であるということができよう。ただし、それらと基督教神学^{キリスト}が著しく違うことは、基督教神学の主流が超越神観を堅持して動かず、至福直観を以ってしても神は理解を超ゆるものであり、自然的人間の理性を以ってして神の全貌をつかむことはできないと切言していることである。これに反して仏教やその他の東洋哲学における主知主義はもっと汎神論的であり、随^{したが}って又しばしばもっと自信に充ちているようである。この汎神論的主知主義が東洋古今の幸福論を顕著に性格づけていると思う。

だが果たして見ることは愛することにまさりて祝福の源であろうか。この地上の我々の生活においては、幸福への秘訣はパスカルのいわゆる賭けにあり、静かに座して栄光の神を観てよろこぶというような味楽の境地でなくて、起こって全身全霊を神の聖前に投げることでなければならぬ。それは髓^{すい}の髓を揺り動かし、全身の血を震蕩^{しんとう}させるような深い大きい実践でなければならぬ。全人格をあげての躍進でなければならぬ。だからパウロは、これを新たなる創造と名づけた。生命が更新するのだ。その間における祝福は澆刺として活気あふるる動的幸福である。天上至福の境においても神は絶大無限の全能力にして、人は微小有限の被造者である。随^{したが}って、神をその絶大なる全容に

において把握しつくすことはできない。また、天国においても我らの神に対する関係は信仰を基調とするものであって、それにより強固に人の霊を安息させ、神のいのちにつながらしめるのであろう。それは至福直観であるよりは、むしろ至福共生であり、飽くまでも生動的な、生きのいのち溢るる境地であろう。それが天上至福の境地であると私(=三谷)は信ずる。イエスが神を父と呼んだ意味は、これであると信ずる。

イエスが神を呼んでわが父⁵⁾、汝らの父と言ったのは、神対人間の根本関係が愛であって知ではないことを強調したものである。イエスは、全人的に幼児の如く直截に神に迫り、そのめぐみを受けよと力説した。即ち、愛先にして知これに随うのでなければならぬ。この愛によって我らのいのちが直接神のいのちに通り、神といのちのいぶきを相共にし得ることよりほかに何の真のよろこびがあり得ようか。近世のプロテスタント教会においては、ルッターもカルヴィン⁶⁾もその信仰態度において極めて主意的能動的であり、一切を神への一途なる信頼に委ねて、多くを問おうとしなかった。故に天上至福の境地についても余計な穿鑿を禁じ、そういう穿鑿は不信仰だと言った。随って彼らの生活態度は深遠に能動的であり、生活のあらゆる面にわたって極めて積極的であった。このような深遠に能動的生活態度を通してでなければ、真にいのち溢るるよろこびに与^{あずか}ることはできない。それができなければ真の幸福に与^{あずか}ることはできない。幸福の真諦^{しんたい}は見ることでなくて、働くことである。享樂することではなくて、創造することである。幸福の至上境は至福直観ではなく、身親しく神を共なる至福共生共働(collaboration)であるに相違ない。天国⁷⁾は終了と静止の国ではなくて、さかんなる建設と澁刺たる生動の国でなければならぬのである。

第三節 幸福なる生涯

幸福とは、旺^{さかん}なるいのちに充ち溢れることだ。そのために我ら人間の限りある貧しきいのちが、もっと豊かな永遠的ないのちにつながれなければならぬ。更^{さら}には、ただ見たり悟ったりするだけでなく、もっと突っ込んで、いのちを以^もっていのちに迫るのでなければ駄目だ。天上においても地上においても、この挺身的な没入、そのひたむきな帰依が幸福の奥義である。だから地上では、すべての悪と偽りとを敵に廻しての不断の健闘。天上では、勝ち誇る愛と真実との活潑地たる建設経営。これが幸福の奥義であり、また人生の真意義である。古今、基督教会は、前者を指して Ecclesia militans 戦闘の教会⁸⁾、後者を指して Ecclesia triumphans 勝利の教会⁹⁾と呼びならわしてきた。

故に、すべて真実なる人生を生き、随^{したが}ってまた真実なるよろこびに与^{あずか}りたくおもう者は、何よりも先^まず極めて積極的に、真実をこめてこの人生を生きぬけるべく覚悟しなければならない。その際、真実をこめて己を捧げるものは、先^まず真実をこめて己を惜しみいたわる。だから幸福の秘訣は、一方では果敢なる献身棄私、他の一方ではしかし誠実なる自愛自養、このふたつの面^{あわ}を併せ実践しなければならない。この後の面に即^{そく}して問題を考えると、具体的用意の眼目としては、ほぼ三つの軸を考えることができる。一は「自分」、特に心身共の健康、二は「家庭」、三は「社会」である。

第四節 職業の選択

生活の場処としての社会、現実には祖国における我ら各自のあり方または分担が、我らの職業または使命の問題である。この職業の選択を誤らないようにすることは、自他の幸福のため極めて大

切である。ただ一部の天才を除く、その他の常人達にとっては、職業は大体どんなものでもよいのである。どんな事でも世の益となり、社会国家のため有意義なものであればよいのである。個人的な適不適というようなことは決して絶対的なものではない。それが有益有意義な仕事ならば、それを為し遂げるに必要な技能態度は誠心誠意勉強すれば得られるのだ。

だが一方では、又^{また}真実やりたいと思う仕事があるなら、そうしてそれが十分にやるに値する仕事であるなら、やり手の多少の顧慮することなしにやるべし、である。その際、生計の事など深く心を労する必要はない。イエスの語を以てすれば「先ず神の国と神の義とを求めよ、然らばすべてのこれらの物は汝らに加へるべし」である。だから我らは真実生きがいのある人生に想いを定めて、一路ただ真実なる一生を眼がけ励めばよい。

人の一生は到底その人みずからのつくる所ではない。多くはその人みずからの造ろうとした所と逆な一生である。にも^{かかわ}拘らず、真摯なる生活者の真実なる一生は、その人みずからの願いしより以上に、一層、深刻にその人の願いの通りの一生にまで完成する。祈らずとても神は護らんではなくて、祈りし以上に神は聴きたまうのである。

人の企画は浅薄幼稚である。その幼稚なる企画が実行されずして、神の博大高邁なる深謀遠慮が実行されるということは、何という幸福であろうか。私(=三谷)は人生における蹉跌と失敗とを恐れない。それらの浮沈に拘りなしに、生きるに値する真実の人生は必ず与えられる。真実もて求むる限り、必ず与えられる。願いしにまさりて豊かに与えられる。そうして、この一事のほかには何の求むるに値するものがあるか。

第五節 結語

良き健康と清純な家庭と一生を投じて悔いなき職場と、この三つを併せ持つことは大いなる幸福である。しかし、それにもまして大いなる幸福は新しきいのちの源に出会うて、新しく造り変えられることである。この新しきいのちさえ与えられるならば、健康を失っても、家庭がなくとも、職場さえ奪い取られても、我らは生气とよろこびとに溢れたぎつことができる。

しかし、この奪うべからざる幸福への鍵は、我ら人間みずからの^{うち}裡にはない。それは、ただ信仰により、超越的創造の主たる神の恩賜として、ただただ恩賜として受領するよりほかない。イエスは、この受領ぶりをたとえて、幼児の如くに受けると言った。無条件無成心のすなおな受領である。こうして宗教的境地を通ることなしに、^{ふえ}不壊の幸福を^{つか}掴むことは不可能であると思う。

それではどうしたらよいか。真実一途の生活¹⁰⁾をすることだ。ほかに道はない。ただただ真実の一本槍、一切の虚偽虚飾を敵に廻して、終始一貫ただ真実を守って生きぬくことだ。しかる時、たとえもし一生苦しみ通し、悩み通すことありとも、それは深く祝福されたる、充ち足らえる一生であるであろう。何故ならば真実なる一生にも増して神の祝福に値するものは他にないからである。

2-2. 解題

『幸福論』最終章である第六章「幸福の鍵」では「真実一途の生き方」が提唱される。三谷よれば、幸福とは「^{さかん}旺なるいのちに^み充ち溢れること」(三谷 1965a,p.388)である。真実の人生を生き、よろこ

びを得たいと思う者は、「真実こめてこの人生を生きぬけるべく覚悟しなければならぬ」(三谷 1965a, p.388)と三谷は説く。その際、「自分」と「家庭」と「社会」の三つの軸に即して考えると、まず「からだの健康は大切である」(三谷 1965a,p.390)。また「良き家庭は良き健康と同じだけ大切である」(三谷 1965a,p.391)。更に社会における私たちのあり方は、職業または使命の問題に関わるので、「誤らないやうにすることは、自他の幸福のため極めて大切である」(三谷 1965a,p.396)のだが、しかし、「真実やりたいと思う仕事があるなら、-----(中略)----- 生計の事など深く心を労する必要はない」(三谷 1965a,p.398)と三谷は言う。いずれにせよ「良き健康と清純な家庭と一生を投じて悔なき職場と、この三つを併せ持つことは大なる幸福である」(三谷 1965a,pp.401-402)と三谷は述べる。

しかし、「それにもまして大なる幸福は新しきいのちの源に出会うて、新しく造り変へられることである」(三谷 1965a,p.402)と三谷は強く主張する。「斯の新しきいのちさへ与へらるるならば、健康を失つても、家庭がなくとも、職場さへ奪ひ取られても、われらは生氣とよろこびとに溢れたぎつことができる」、「然し斯の奪ふべからざる幸福への鍵は、われら人間みづからの裡にはない」、幸福は「唯信仰により、超越的創造の主たる神の恩賜として、唯々恩賜として受領するほかない」(三谷 1965c,p.402)のである。そのためにも、「真実一途の生活をする事だ」「唯々真実の一本槍、一切の虚偽虚飾を敵に廻して、終始一貫唯真実を守つて生きぬくことだ」(三谷 1965a,p.402)と三谷は『幸福論』の最後をまとめているのである。

上のように最終章である第六章「幸福の鍵」では、真の幸福に達する要件、すなわち新しき創造の不断の連続である「新生」の重要性を再び示すことによって、著書全体として、三谷の中で不可分な要素である信仰者・学者としての「高潔な理想」と、生活者としての「実践的な教訓」とを融合させ、三谷はこの著書『幸福論』を完結しているのであるが、『信仰の論理』を筆頭にその他の三谷の著作・論文との対照により更に次のことが指摘できる。

これまで述べてきたように、三谷の実生活における苦難の末の「棄私」による新生の体験は、三谷にとって徹底他者との出会いを実現させ、「愛他」の道を歩ませることとなる。その体験は、事後振り返る時、徹底他者による恵みの体験として認識される。それは『幸福論』における三谷の次のような言葉から実感される。それはすなわち「何よりも先ずイエスは新しきいのちと新しきよろこびとを訓えた。『凡て労する者重荷を負ふ者、われに來れ、われ汝らを休ません』と言ふ。『幸福なる哉、貧しき者。幸福なる哉、義のために責められたる者』と言ふ。かれは新しき天地と新しきよろこびとを告げ知らず者である。新しきいのちのよろこびを約束するものであつた。基督を信ずる者はかれに於て新生とその浄福とを約束せられた。この新生が凡ての祝福の源であつた」(三谷 1965a,p.317)というものである。

3. おわりに一まとめに代えて一

本稿では、三谷隆正『幸福論』第六章「幸福の鍵」について、まず本文の内容を要約し、次に要約者の注を付し、さらに本文内容の解題を試みた。最終章である第六章「幸福の鍵」では、真の幸福に達する要件、すなわち新しき創造の不断の連続である「新生」の重要性を再び示すことによって、著

書全体として、三谷の中で不可分な要素である信仰者・学者としての「高潔な理想」と、生活者としての「実践的な教訓」とを融合させ、三谷はこの著書『幸福論』を完結している。

また、処女作『信仰の論理』と遺作『幸福論』との対照であるが、三谷隆正の幸福論はキリスト教信仰に基づく幸福論である点が最も重要である。換言すれば「信仰の論理」すなわち「神学」を基調とした幸福論である。したがって、その幸福論は、幸福が快樂か徳かであるかを問題にせず、利己的主観的な幸福論を否定し、自己を棄て、他者に自己を捧げるところに、人生の意義があり、幸福があるとする。

しかし、他者といっても、隣人や社会や国家や人類ではなく、「大いなる他者」「絶対他者」「徹底他者」とも呼ばれる神、すなわち量的にも質的にも全く卑小なる人間を超えた人格神である。それは、かつてパウロやアウグスティヌスが捉えられた神であり、人間の卑小なる個に遥かに勝り、遥かに充実せる「いのち」の主なる絶対存在である。

こうした絶対他者たる生ける神の「いのち」の中に、己を没入することができてこそ、私たちは真に生きがいを感じるのがある。幸福はそうした献身の内にのみある。すなわち、超個人的人格神に対する己を棄て去った全人格的傾倒・献身が幸福であるとする、処女作『信仰の論理』で展開された「棄私愛他」を中心とした「徹底他者論」こそ、『幸福論』の骨子なのである。

その思想は、三谷隆正という一個の人格がもつ不可分なる三つの位相、すなわち「信仰」と「学問」と「生活」において実践された。すなわち、イエス＝キリストの受難(*passion*)の如く、[他者と共に]苦しみに耐える(*compassion*)という己の人生に対する三谷隆正の一貫した姿勢を通して、その行動と思想が表裏一体になっていったプロセスの中に『幸福論』がある。その意味では『幸福論』は、三谷隆正というホリスティック(*holistic*)な存在が後世の人びとに遺した静寂の中にも情熱(*passion*)を秘めた「遺書」(*testament*)であったとも思われるのである。

注

- 1)「パスカル『パンセ』」に関しては次の文献を参照。パスカル(2001)『パンセ I・II』(前田陽一・由木康訳)中央公論新社[特に「第3章 賭の必要性について」]。
- 2)「カトリック教会神学」に関しては次の文献を参照。ピエール・アドネス(1968)『カトリック神学』(渡辺義愛訳)白水社。
- 3)「至福直観」(*beatific vision*)とは次のような意味である。「神を直接に見ること、これが天国の幸福の状態である。教会の定義によれば、義人の靈魂は神の本性を顔と顔をあわせて直観的に見る。その結果、神の本質は何らかの被造物を通して間接にではなく、直接に、ありのまま、はっきりと包み隠すことなく知られる。その上、聖人達の靈魂は三位にして一体の神をありのままにはっきりと見る。直観というのは肉体の視力との類比によって精神的に見るからである。至福というのは、神を直接見ることは意思と人間存在全体の幸福を生み出すからである。神を直接に見ることの結果として、神の幸福に参加するのである。人間的な話し方によれば、三位一体の幸福は神が自分自身の無限の善性について完全な知識を持っていることの結果である。天使も至福直観を楽しみ、キリストの人間性はこの地上に生活していた間にも至福直観の状態にあった。語源はラテン語 *beatificus* 至福の、大きい幸福または祝福を与える。またこの語は

- beatus 幸福な、から」[ジョン・A・ハードン(編著)(1986)「至福直観」『カトリック小事典』(A・ジンマーマン監修、浜寛五郎訳)エンデルレ書店、p.124]。
- 4)「ダンテの『神曲』」に関しては次の文献を参照。ダンテ・アリギエーリ(2003)『神曲 I.地獄篇 II.煉獄篇 III.天国篇』集英社。
- 5)「イエスが神をわが父と呼んだこと」に関しては次の文献を参照。三好迪(1987)「神にアバと呼ぶイエスと小さき者への配慮」三好迪『小さき者の友イエス』新教出版社、pp.101-123。
- 6)「カルヴィン(カルヴァン)」に関しては次の文献を参照。ジャン・カルヴァン(2000)『J・カルヴァン キリスト教綱要(1536年版)』(久米あつみ訳)教文館。
- 7)「天国」に関しては次の文献を参照。三谷隆正(1965)「神の国の観念について」『三谷隆正全集・第2巻』岩波書店、pp.41-54。
- 8)「戦闘の教会」(Church militant)とは「罪と誘惑に対して不断の戦闘を続けている地上の教会。したがって、この世と肉と悪魔に対して戦闘を続けている教会という意味である」[ジョン・A・ハードン(編著)(1986)「戦う教会」『カトリック小事典』(A・ジンマーマン監修、浜寛五郎訳)エンデルレ書店、p.211]。
- 9)「勝利の教会」(Church triumphant)とは「生存中に、悪への傾き・この世の誘惑・悪霊の誘惑に打ち勝って天国の栄光にいる人々の教会という意味である」[ジョン・A・ハードン(編著)(1986)「勝利の教会」『カトリック小事典』(A・ジンマーマン監修、浜寛五郎訳)エンデルレ書店、p.142]。
- 10)神の祝福に値する「真実一途の生活」に関しては次の文献を参照。三谷隆正(1965)「幸福論」『三谷隆正全集・第1巻』岩波書店、pp.180-191。三谷隆正(1965)「真実一途」『三谷隆正全集・第4巻』岩波書店、pp.202-205。

引用文献

- 三谷隆正(1940)「新生と浄福」『岩波講座倫理学・第4冊』岩波書店、pp.1-33。
- 三谷隆正(1965a)「幸福論」『三谷隆正全集・第2巻』岩波書店、pp.215-402。
- 三谷隆正(1965b)「信仰の論理」『三谷隆正全集・第1巻』岩波書店、pp.1-100。